

<離婚届>

京都市会議員候補の話

私が京都市会議員に立候補したのは1987年4月の選挙だったが、同期でこくた恵二、山中渡の両議員がいる。

当時私は1971年3月に6年かかかってやっと京都大学理学部宇宙物理学科を卒業して、そのまま日本共産党の専従として働いていた。途中で5年間ほど京都府委員会で文化部の仕事などにかかわったが、ほとんどは日本共産党東地区委員会(1978年からは分割して左京地区委員会)勤務であった。87年4月の選挙を前にして当時現職の他谷岩佐議員が高齢のため「そろそろ後継者を選定しなければ」と、それまで3回他谷議員の選挙実務を担当した私も思案していたが、当時の中川義文左京地区委員長は86年5月になって突然「他谷さんが後継者は山本とっている」と告げ、来年の市会議員選挙に立候補するよとの話があった。

私はかねてより他谷さんの選挙だけでなく現職議員の活動にも裏方としてかかわってきていたので「どんなことがあっても議員なんかにはならない。一生裏方をつとめる」と心に決めていたので「そんなバカな話があるか」と内心では思いながら、しかし「人事権は組織のトップが握っており、拒否するのであれば身を引かざるを得ない。委員長と副委員長の私に対立するわけにはいかない」との思いから「家族を説得する」と約束して、自宅に帰って妻に「他谷さんと中川委員長に言われて来年の市会議員選挙に出ることになった」と告げた。

世間知らず

すると、翌日離婚届が目の前に指し出された。「立候補するのであればご自由にどうぞ。私は承服できません。離婚します」というわけである。妻の言い分はこうだ。「あなたのような人に市会議員が勤まるはずがない。近所の人にも挨拶はしないし、庶民感覚はないし、世間のことも何にもわかっていない」。たしかにその言い分については私自身もよくわかる。

私は漁師の家に育ったので滋賀県水口の近江商人の荒物屋(以前は米屋)の娘として育った妻とは生活感覚がまるきり違う。たとえば妻が「借金をして家を買う」というので「一生借金を背負って追われる生活なんかいやだ」と言うと「あんたはあほか」といわれた。「このまま家賃を払い続けても何も残らないが、借金を払い終わったら財産になる。そんなこともわからないの」というわけで、生命保険をか

けるときも「俺の命がなくなるというのに金がほしいのか」というと「バカ、死んだときのことよりも子どもが高校、大学と進学するときの支度金も出るし、事故や病気で体が不自由になったら責任もてるんですか」といわれ、私はそのたびに「へー、世の中ってそういう仕組みになっているのか」と驚いて感心していた。

卒業して日本共産党専従に

私が日本共産党の専従活動家になったのは学生時代に生活全体を学生運動で過ごし、まともな就職など望むべくもなかったという事情もあった。1967年自衛官入学反対闘争で全学学生大会・全学ストライキ、総長交渉と全国の耳目を集めたときの京都大学同学会(全学自治会)の委員長を2期続けてつとめ、その後京都大学も学園紛争に突入していった。その当時学生運動の中心にいて封鎖解除や全共闘トロツキスト集団との激しい対決が続き、ほとんど授業にも出席せず、卒業も最後までどうなるか不安だったが6年間かけてやっと卒業証書だけは手にした。それと「日本共産党の専従になれば、口先だけのうそや心にもない会社や組織の方針に縛られることもない」との思いがあったから専従活動家の道を選んだのであった。(思えば単純!)

しかし、実生活の上では妻の言うとおりで、確かに私は近所の方との挨拶などは一切しなかった。次々と挨拶をするたびに「本を読む時間がなくなる、もったいない」と本気で思っていた。近所の人には「朝早くから真夜中まで日曜日もなしに働いて相当に貯めこんでいるらしい」とかうわさをしていたようだ。

妻の説得には5月から7月まで3ヶ月を要したが、中川委員長の押しの一手でついに「選挙は一切手伝わない。家族を巻き込まない」ということで立候補することになって、4月選挙で当選を果たした。



他谷さんと蹴上のインクラインで